

我が家は代々、広島県沼隈郡郷分村にある浄土真宗永久寺の住職を務めていた。祖父が壽栄、父は鉄念と言った。明治三十九年（一九〇六年）

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
おん けん ぶん ちく え

②

生まれの父は、大正九年（二〇年）に徳度し浄土宗の僧侶となった。

父は四人兄弟の三番目。長女壽香は広島県の萩にある阿弥陀寺に嫁いだ。兄は良弁と言い、吉野・丹治の金龍寺の住職になった。下の弟光丸は、後、ハワイに渡った。だ

から米国には「エクアン」という姓のいとこが多い。

母香津子は明治四十三年にハワイで生まれた。父親は広島県神石郡小島村出身の大工の棟梁で、ハワイに行ったが、体を壊して日本に帰ってきた。母が小学校三年くらいのころだ。

母は広島県の松永高等女学校を卒業後、東京の渡辺裁縫

1歳で渡航 寺の長男

青い空と海、裸足の暮らし

学校（後の東京女子専門学校）に通っている時、大正大学に在学中の父と知り合い結婚した。今風に言う「できちゃった婚」であろう。

私は昭和四年（一九二九年）九月十一日、東京府北豊島郡西巢鴨町九八七番地で長男として産声をあげた。両親は大正大学に近い同窓会風のモダンなアパートで生活していたよう

となつてゐる同窓会青山アパートのような建物だ。

父は大学卒業後、増上等の法主をされていた権尾弁匠というお師匠さんの元で、大蔵経の編さんに携わっていた。父は人前で演説したりするのが好きで、仏教を伝える伝道僧になりたがっていた。母がハワイで生まれたことが刺激となつて、ハワイに行くこと

ということになつたらしい。父は昭和五年十一月、ハワイ開教区開教使に任せられ、私は一歳の時に両親に連れられてハワイに渡った。父はホルルの浄土宗本部で開教使としての訓練を受けた後、昭和七年五月、ハワイ諸島で一番大きいハワイ島のハマクア部パウハウに赴任した。

昭和七年に妹の昌子がハワイで生まれ、日本に戻つてか

ら弟祥二が同十三年、末妹尚美が同十四年に生まれた。祥二は現在、日大芸術学部教授で、デザインを教えている。もの心ついた時はハワイだから、ハワイの風景が記憶の原風景だ。お寺は小高い所にあって、前が坂で、その先が



ハワイ島で幼児期を送る

の夕日と比べられるくらいきれいだ。父は私を肩車に乗せ「日は落ちる、日は落ちる」と叫ぶ。すると、大きな太陽がズンズンと落ちていく。

海だ。青い空、広々とした海、ハイビスカスの赤。靴ははかすにほとんど裸足で歩いていく。サトウキビ畑の間にいくつかの谷があり、サトウキビの茎をしゃぶりながらトボトボ歩く。マンゴーやグアバの木に登って実を採る。雄大な自然が身近にあった。

母は開教助員として父を助け、日曜学校など、お寺の手伝いをしていた。母にはほぼ毎日、お寺の欄干から妹と一緒に夕日を拝まされた。父には同じ太陽でもハワイ島西部のコナ地区からの夕日を拝まされた。コナの夕日はマニラの夕日と比べられるくらいきれいだ。父は私を肩車に乗せ「日は落ちる、日は落ちる」と叫ぶ。すると、大きな太陽がズンズンと落ちていく。父は新しいものが好きだった。自動車も、カメラも好きで、コダックのカメラで写真を撮っていた。ゴルフもよくして、両親も一緒にゴルフをした。両親は欧米生活にあこがれた近代主義者だったので、蓄音機、冷蔵庫など近代技術の産物は極めて早く取り入れていた。（インダストリアル・デザイナー）

デザイナー